

研究 テーマ	人や社会と関わりながらドラマやドキュメンタリーをつくる	
担当者名	後藤一樹	
ゼミの 関連キー ワード	ディレクター、プロデュース、演出、演技、役者、ロケ撮影、画と音、ライフストーリー、フィールドワーク、リサーチ、協働作業、コラボレーション、青春はドラマだ	
各 研究 の 概 要	<p>【ゼミナール1】 人と出会い、お互いの変化する。この変化がムービング・イメージになる。そのような作品の登場人物は、作者の脳内イメージの操り人形ではなく、それぞれが作者とは異質の声をもち、交感している。この交わり合いに感動がある。以上を意識しながら、ドラマ、ドキュメンタリー、ミュージックビデオ、バラエティ、ラジオ、小説等を制作する。</p> <p>【ゼミナール2】 ゼミ生は教員と向き合うだけではなく、他のゼミ生と向き合って協働する。目の前の人間から最高のものを引き出して、動くイメージにしていくのが演出である。教室や大学の中に閉じこもらず、一步一步動き出せば、自分でも気づかずに隠し持っている、いろいろな面に光を当てることができる。そのため、撮影旅行、公演旅行、夏と冬のゼミ合宿、映画祭への参加、スポーツ大会なども開催している。教員は、アイデア面（企画、脚本、画コンテ）、技術面（演出、演技、撮影、録音、照明、編集、整音、カラーグレーディング）、リサーチ面（研究、執筆、ロケハン、フィールドワーク）でゼミ生を指導しながら、ゼミ生同士をつなげ、ゼミ内で日々起こるムーブメントを大学外の人物や団体につなげていく。</p> <p>【卒業研究】 日本の新卒採用においてメインに評価されるのは、知識や技術では決してなく、大学時代の活動を通して自分がどう変化＝成長したかに関する経験の言語化である。その変化の伸びしろと方向性が就活で問われるのだ。映像制作の各種プロジェクトをプロデュースして演出し、そこでの自分の変化を目に見え・耳に聴こえるかたちで社会と共有するゼミの経験を生かして、映像業界（ディレクター職）に毎年ゼミ生を輩出する一方、多岐にわたる業界で先輩たちが活躍している。教員はプロデューサーとなり、ゼミ生一人ひとりの人生から最高のものを引き出してかたちにする。卒業制作と並行して自己PR添削や面接練習、進路相談なども行い、人生のドラマを展開していく。そして社会の舞台に出るとき、これまで青春の時間を共につくったゼミの仲間という最高の役者が隣にいることに気づくだろう。</p>	
過去の 卒業論文 の題目例	<p>銚子電鉄で出会い再会するふたりの友情ドラマ／登場人物が葛藤し生きている映画の制作／メソッド演技法を手がかりにした演技／映画の空間と時間に合わせて役を演じる／青春を演出するための撮影／ポーカーリストを魅力的に撮る／「自分らしく生きる女の子」を表現したミュージック・ビデオの制作／空間と時間をまたぐ映像技法を駆使したMVの演出／人やモノを魅力的に映し出す美的な映像の制作／千葉県の名所を巡るVlog制作／コロナ禍の飲食店を描いたドキュメンタリー作品制作／小説「哀哭の声」と楽曲「最高の私で」の制作</p>	
関連する 課外活動	<p>銚子電鉄とのドラマの共同制作／小学生が描く絵日記の映画制作（イオンモール主催）／埼玉県ふじみ野市や市川真間の商店街PR動画制作（市内観光素材コンテスト受賞）／慶応大や早稲田大とのドキュメンタリーの共同制作（学会等で発表）、不登校支援やLGBT支援（ゼミ生の関心にもとづく社会活動と作品制作）／Cube Timesでの学内放送／You Tube配信</p>	